

あのマチ・地域おこし活躍中  
あのムラ

厚真町の事例

No57

1. はじめに

厚真町は日本海と太平洋をつなぐ道央ベルト地帯の中頃、海洋物流拠点である苫小牧市の東、空港を擁し北海道の空の玄関である千歳市の南に位置し、道内の経済・文化の中心である札幌市からも約六五kmと比較的近辺に位置することから、一九七一年（昭和四六）年策定の「苫小牧

東部大規模工業基地開発基本計画（苫東計画）において苫小牧市と並び将来の重工業地帯としての発展が予測されてきた。しかしながら、二度のオイルショックの影響などにより工業化の進展は予想ほどには達せず、むしろ減反・転作奨励の逆風に負けず好評な「たんとうまい」ブランドに代表される、米どころである。

二〇〇九（平成二一）年度における町の面積は四〇、四五六ha、総人口・総世帯数は四、九二四人・二、〇一二世帯となっており、うち農地面積は五、〇四二ha、農業従事者数は一、五二四人・四六六世帯と、マチに占める農業の割合が依然として高いことが特徴としてあげられる。

農地は町の中央部、厚真川沿いの地区に集中しており、明治



水稲をかたどった厚真町のカントリーサイン

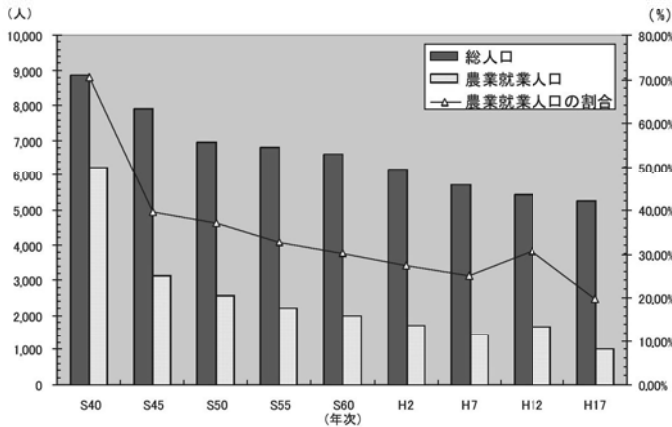


図1 厚真町における総人口及び農業就業人口の推移(S40～H17)

※出典：各年度版農業センサス・農林業センサス

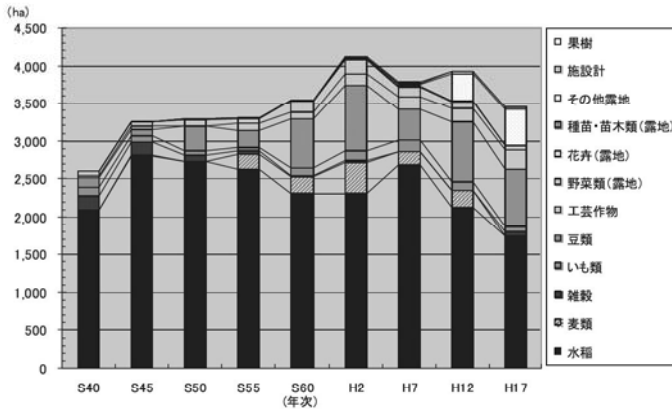


図2 厚真町における作目別耕地面積の推移 (S40～H17)

※出典：各年度版農業センサス・農林業センサス

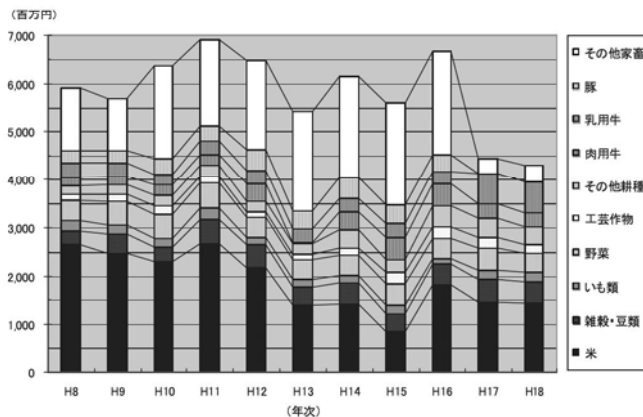


図3 厚真町における近年の農業粗生産額の推移(H8～H18)

※出典：厚真町町勢要覧

の開拓期から稲作中心のマチとして発展を続けてきている。また、転作による畑作や畜産も盛んで、株式会社安愚楽牧場(栃木県那須塩原市)の保有する一大肉牛肥育・養豚場である「胆振牧場」をはじめとした肉用肥

育牛・素牛育成場、酪農場、養豚場、軽種馬育成農家が林立している。

## 2. 厚真町と稲作

古代より先住民族が居住していた厚真川流域は、地理的に他地域からの侵害を受ける事が少なく、自生の野草も豊富、狩猟

や漁労にも適した地帯であった。また、石狩、十勝、日高、胆振の各地帯に通じる重要な交通上の結節点でもあった。江戸時代終わり頃には、「アツマコタン」、「キムンコタン」、「トンニカコタン」という三つの大集落が現

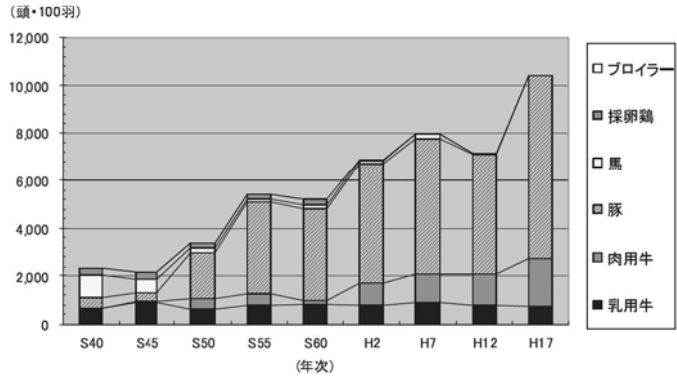


図4 厚真町における家畜頭羽数推移 (S40~H17)

※出典：各年度版農業センサス・農林業センサス

在の厚真町内にあり、かの松浦武四郎も一八五八(安政五年)にトンニカコタンに滞在したという。

一八七〇(明治三)年に厚真に和人として初めて入植したのは、新潟県出身の青木與八であ

り農民の入植が相次いだ。このとき入植者たちは本州・道内各地より各種種籾を持ち込み、厚真での稲作に挑戦したが、本州から持ち込んだ品種の栽培には苦勞が伴った。明治期の入植民たちや大正期の北海道農事

試験場の品種改良に加え、堆肥の増産、土地改良なども進められたのだが、一八九七(明治三十)年、一九一〇(明治四三)年、一九一三(大正二)年には水害や冷害などによる大凶作が発生し、希望を失って村を離れる者も少なくなかったという。

高度経済成長に伴った、「向都離村」という言葉に代表される全国の産業構造・人口構造の激しい変化の中であっても、田植機の普及前の昭和四〇年代には田植人員の不足から隣接する苦小牧市よりパート労働者をバ

る。このとき青木が入植したのは現在の浜厚真地区で、奥地へ入植する開拓民相手の渡船業や情報提供業を営んでいた。また一八八四(明治一七)年には山本鉄太郎が開拓民として入植して漁業や林業などを手がけ、次第に和人の人口も増えていった。特に一八九二(明治二五)年には厚真の地で初めて水稲が試作され、この地が稲作に適していることがわかり、明治二〇年代には各地よ

一)年にも冷害が発生したが、それらを教訓として耐病・耐冷性の高い「栄光」品種が奨励された結果、一九六〇(昭和三五)年には「北海道米出荷三〇〇万石突破記念式」において厚真町米作研究会が表彰を受けるなど、厚真米は着々とその地位を市場において高めていった。

てもトラクターの導入とそれに呼応した圃場区画・ライスセンターの整備等が積極的に行われ、上位等級米の出荷率は年々向上し、一九六九(昭和四四)年には北海道産米改良共励会において食糧庁長官賞ならびに北海道産米改良協会会長賞を、一九七一(昭和四六)年には北海道農業賞を受賞する快挙を成し遂げている。

産性向上の努力が実った結果でもあった。

町に割り当てられたのである。

それまでの努力の結晶であつた稲作を手探りで畑作に転作することは、農業者の心境として

「くら米」として厚真町農協が独自に販売開始、また後に栽培が開始された「きらら397」も

うまいステーキシヨン」隣で現在試験運用中であり、クリーン農業推進の一環として従来の消毒薬「モミガード」による種籾消毒に換えて温水による消毒を行うシステムとして活躍を期待されている。これは、現在厚真町

（昭和四四）年の府県での自主流通米制度・一九八〇（昭和五

五）年の道内での特別自主流通米制度発足に対し、厚真町農協（当時）が出した答えは、集荷

〇〇（平成十二）年から「吟風」が町内で栽培され始め、どちらも好評を博している。

こまい広域農協管内唯一の施設であり、厚真産米のみならずJA管内全てにおけるクリーン農業の推進において、キーとなるシステムでもある。

事業の一元化等による良質米主産地化の推進であつた。一九七

三（昭和四八）年の第四次中東戦争勃発に端を発したオイル

シヨックの影響で、厚真町をその計画地域に含む「苫小牧東部大規模工業基地開発計画」は停

滞し、他産業の成長についてもさほど望めなかつた。また、いわゆる「機械化貧乏」による困窮も問題であつた。そんな中、

一九七七（昭和五二）年には前年目標面積の二倍以上の九三〇

haの転作面積が政府により厚真

町に割り当てられたのである。

それまでの努力の結晶であつた稲作を手探りで畑作に転作することは、農業者の心境として

（昭和四四）年の府県での自主流通米制度・一九八〇（昭和五

五）年の道内での特別自主流通米制度発足に対し、厚真町農協（当時）が出した答えは、集荷

〇〇（平成十二）年から「吟風」が町内で栽培され始め、どちらも好評を博している。

こまい広域農協管内唯一の施設であり、厚真産米のみならずJA管内全てにおけるクリーン農業の推進において、キーとなるシステムでもある。

事業の一元化等による良質米主産地化の推進であつた。一九七

三（昭和四八）年の第四次中東戦争勃発に端を発したオイル

シヨックの影響で、厚真町をその計画地域に含む「苫小牧東部大規模工業基地開発計画」は停

滞し、他産業の成長についてもさほど望めなかつた。また、いわゆる「機械化貧乏」による困窮も問題であつた。そんな中、

一九七七（昭和五二）年には前年目標面積の二倍以上の九三〇

haの転作面積が政府により厚真

町に割り当てられたのである。

それまでの努力の結晶であつた稲作を手探りで畑作に転作することは、農業者の心境として

（昭和四四）年の府県での自主流通米制度・一九八〇（昭和五

五）年の道内での特別自主流通米制度発足に対し、厚真町農協（当時）が出した答えは、集荷

〇〇（平成十二）年から「吟風」が町内で栽培され始め、どちらも好評を博している。

こまい広域農協管内唯一の施設であり、厚真産米のみならずJA管内全てにおけるクリーン農業の推進において、キーとなるシステムでもある。

事業の一元化等による良質米主産地化の推進であつた。一九七

三（昭和四八）年の第四次中東戦争勃発に端を発したオイル

シヨックの影響で、厚真町をその計画地域に含む「苫小牧東部大規模工業基地開発計画」は停

滞し、他産業の成長についてもさほど望めなかつた。また、いわゆる「機械化貧乏」による困窮も問題であつた。そんな中、

一九七七（昭和五二）年には前年目標面積の二倍以上の九三〇

haの転作面積が政府により厚真

町に割り当てられたのである。

それまでの努力の結晶であつた稲作を手探りで畑作に転作することは、農業者の心境として

（昭和四四）年の府県での自主流通米制度・一九八〇（昭和五

五）年の道内での特別自主流通米制度発足に対し、厚真町農協（当時）が出した答えは、集荷

〇〇（平成十二）年から「吟風」が町内で栽培され始め、どちらも好評を博している。

こまい広域農協管内唯一の施設であり、厚真産米のみならずJA管内全てにおけるクリーン農業の推進において、キーとなるシステムでもある。

事業の一元化等による良質米主産地化の推進であつた。一九七

三（昭和四八）年の第四次中東戦争勃発に端を発したオイル

シヨックの影響で、厚真町をその計画地域に含む「苫小牧東部大規模工業基地開発計画」は停

滞し、他産業の成長についてもさほど望めなかつた。また、いわゆる「機械化貧乏」による困窮も問題であつた。そんな中、



「たんとうまい」ステーションの概観



試験運用中の種籾温水消毒施設（一部）



苫小牧・オエノンホールディングス㈱のバイオエタノール工場（一部）

が、今後とも厚真産米の躍進が期待される。

### 3. 多収米「きたあおば」とバイオエタノール

料用を用いるのみでなく、隣接する苫小牧市に二〇〇九（平成二一）年に完成したオエノンホールディングス株式会社（東京都中央区）の苫小牧バイオエタノール工場にも近い将来、バイオエタノール製造原料米として納入する予定となっている。

道バイオエタノール株式会社の工場が上川郡清水町に完成し、既に十勝地区産を中心とした道産原料を使用している。

両工場のバイオエタノールは現在全て石油連盟（東京都千代田区）に販売され、新日本石油（東京都港区）の関連会社・新日本石油精製株式会社根岸製油所（神奈川県横浜市）でETBE（エタノールを原料とした燃料品質改良剤）添加ガソリンに加工されて首都圏で販売されているが、将来的にE3（バイオエタノール三%混合ガソリン）・E10（同一〇%混合ガソリン）として道内に供給する構想もある。厚真産米や十勝産ビートで北海道中のクルマが走る日も、そう遠くない未来に期待できそうである。

### 4. 厚真町農業GIS

小規模農地保有世帯がおおの保有する農地の、自治体あるいは農協管内全体としての利用調整をいかに効率的に進めるかが、高度な農地利用を実現し、農業生産基盤の維持を行っていくにあつての重要な課題である。その効率化を支援するツールの一つとして大いに期待されているのが農業GISで、厚真町においても高度な農地利用の屋台骨となつているシステムである。

前項で述べた主食用米・酒米の栽培に加え、多収米「きたあおば」の試験栽培が厚真町内で行われていることをご存知だろうか。この「きたあおば」、独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構北海道農業研究センター（札幌市豊平区）で開発されたもので、玄米収量で従来品種「きらら397」に比べ約二五%もの多収成績を誇る優良品種である。

酪農・畜産も盛んな厚真町の特性を生かし、ホールクロップサイレージ（WCS）として飼

格外小麦を原料としたバイオエタノールの生産（計画値・年産一五、〇〇〇kl）を行う、JAGグループ北海道関連会社の北海

本誌読者には「GIS」という用語に馴染みのない方も多いかと思う。「地理情報システム（Geographic Information System）」の略で、従来紙の地図・台帳によつて管理されてきたさまざまな情報をコンピュータ上

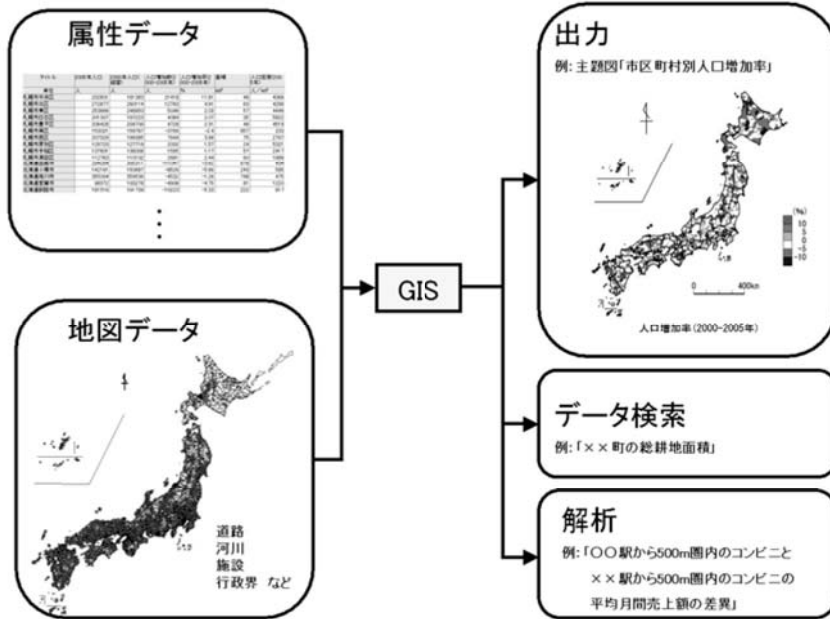
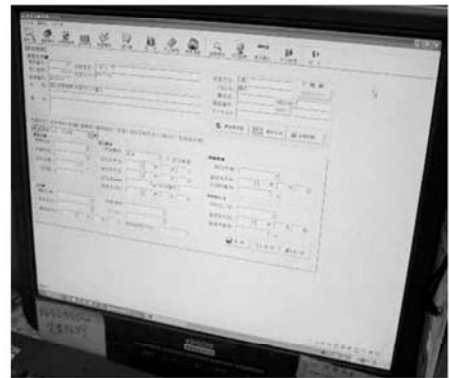


図5 GISのしくみ



厚真町農業GISの操作画面(2)



厚真町農業GISの操作画面(1)

で一元管理するシステムの総称である。北米では一九六〇年代より行政による統計情報の管理に実用化され、日本でも一九九五（平成七）年の阪神淡路大震災を契機として防災分野から本格的な利用が始まった。

GISの機能は、主に三点にまとめることができる。一点目は、入力された地図情報を面・線・点として数値化し、必要に応じて処理・変換を行って出力する出力機能である。二点目は、地図要素と台帳要素を一元管理し、地図からも台帳からも検索ができるデータベース機能である。三点目は、異なる複数の情報を地図上で重ね合わせ、空間的解析、統計処理、モデリング、シミュレーション、画像解析等を行う解析機能である。

国としてもGISの利用・普及には積極的な取り組みを行っ

ており、一九九五（平成七）年には「地理情報システム関係諸庁連絡会議」が設置され、一九九六（平成八）年には「国土空間データ基盤の整備及びGISの普及の促進に関する長期計画」が定められた。さらに同長期計画終了後の二〇〇二（平成一四）年には「GISアクションプログラム二〇〇二―二〇〇五」が策定され、農水省においても「農林水産省地理情報システム実施計画二〇〇二―二〇〇五」が同様に策定されている。

それらに基づいて「産地づくり支援農地情報整備促進事業」として、産地形成に有効である各自治体・農業団体等が個別に保有する情報の共有化・相互利用を図るため、農地情報等のデータ整備やシステム導入、さらにGISを利用した農地情報整備に関わる技術普及、研修指導等

日・北海道版の「日本農業新聞」にも紹介された。

## 5. おわりに

以上のような取り組みの下、厚真町の農業はその「元氣」を維持し、一定の地位を保っている。小売業などにおいてはモータリゼーションの進展に伴い、隣接する苫小牧市の大型商業施設などに水をあけられている面はあるが、農業を基幹産業としたマチの将来には希望が広がっている。

最後にこの場をお借りして、取材にご協力いただいたとまこまい広域農協営農販売部長兼厚真支所長代理・畑島氏、厚真町産業経済課農林水産グループ主任・遠藤氏、オエノンホールディングス株式会社苫小牧工場

総務グループマネージャー・熊谷氏、北海道バイオエタノール株式会社総務企画部長・菅野氏に御礼申し上げ、筆を置きたい。

(社)北海道地域農業研究所  
専任研究員 経亀 諭



厚真町の特産品

